



TITLE:

(随想)米国泌尿器科学会東南部  
1960年総会に出席して

AUTHOR(S):

友吉, 唯夫

---

CITATION:

友吉, 唯夫. (随想)米国泌尿器科学会東南部1960年総会に出席して. 泌尿器科紀要 1960, 6(5): 343-344

ISSUE DATE:

1960-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111951>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 5 号

昭和 35 年 5 月

## 随 想

### 米国泌尿器科学会東南部1960年総会に出席して

京都大学医学部泌尿器科学教室 友 吉 唯 夫

1960年度米国泌尿器科学会東南部総会は3月13日から17日までの5日間 Florida 州 Jacksonville 市の Robert Meyer Hotel で、会長 Edgar Burns 教授 (Tulane University, New Orleans) のもとに開かれた。東南部の範囲はA B C順に Alabama, Florida, Georgia, Kentucky, Louisiana, Mississippi, North Carolina, South Carolina 及び Tennessee である。全国的な総会、即ち全米泌尿器科学会は、本年は5月16日～19日の4日間 Chicago で行われ、筆者も出席の予定であるが、このように Section ごとに行われる学会もある。

第1日は Registration のみで発表はない。会費は会員1人35ドル、夫人同伴の場合は更に25ドル追加であるが、私のような Resident は Guest として無料招待をうけた。事実上の学会は14日に始まった。午前中は一般演説であるが、全体として受けた感じを述べると日本では総会という試験管からとび出したような実験的研究が多いのに比べてこちらは内容的に臨牀的かつ実際的なものが多く、直接診療に関係した発表が大部分を占めているといえる。したがって日本ではともすると軽視されがちな practical な問題が真面目に論ぜられている。風変りな発表として私の Boss の McIver 博士が、Clinical Records や Urogram を能率的に保存し取扱うために考案した棚を提示したが、これもそういう傾向を示すものである。

初日の午後は日本の学会では例をみないとおもわれる Pyelogram Hour が開かれた。これはどういうのかというと、先ず簡単に病歴と臨牀検査成績をのべたのち、Urogram を次々と示しつつ会場の会員とその興味あるX線写真を提示した Doctor との間で質疑応答をくり返して診断に至る Discussion を行なうという仕組みであつて Urogram の多くは典型的なものでなく、きわめて判読のむずかしいものが選ばれ、最後に診断をきいてはじめて成程と合点のいくようなものが多い。このようにして20例近くの症例が活発に討論されたが、参考のためにそのうちのいくつかを挙げると、○腎動脈枝閉塞による腎梗塞○異常血管にもとづく U-P Junction 狭窄による水腎症○副腎皮質腫瘍○腎下極膿瘍自然破裂○腎良性腺腫○尿道弁膜形成と水腎症○尿管血管腫○石灰化精管○結核性尿管回腸瘻○尿管憩室などで冗談もとび、よく笑うのでなごやかな雰囲気で討論がすすめられた。予備知識なしに行われるので実力がないとポイントを逸する。

第2日の圧巻は Tulane University の腎移植であつた。単腎尿毒症児に一卵生双生児同胞の健腎を患児右腸骨窩に移植、腎動脈は Hypogastric Art. と、腎静脈は Iliac Vein

と吻合、尿管は膀胱に吻合された。移植腎の血流遮断時間は42分、経過順調で術後 IVP はこの手術の素晴らしい成功を物語っていた。

第2日の午後は種々の新しい Idea の泌尿器科手術映画が上映された。こういう映画はほとんど製薬会社の援助でつくられたものである。こうかくといかにも製薬会社が何でも援助してくれるかのような印象を与えるが日本の大学病院と製薬会社の間にみられるような関係にもとづくものではない。宣伝費の使い方の相違というところであろうか。

第3日の午前は昨日と同じく一般演説、午後は Cleveland Clinic の I.H. Page 博士（内科学専攻）による“高血圧の機序”と題する特別講演が行なわれたが、われわれ泌尿器科医にとって注目されたのは、Cleveland Clinic に於て300余例の高血圧患者に Aortography を行ない、そのうち27%は狭窄性腎動脈疾患に起因することを発見、59例に血管系又は腎臓に対して外科的手術を行つている点であつた。

第4日の午前は一般演説、午後は腎性高血圧に関する Panel Discussion が Burns 教授司会のもとにひらかれた。討論者は Dr. E. Burns, Dr. I. H. Page, Dr. V. A. Politano (Duke University) 及び Kansas からみえた病理学専攻の Dr. F. C. Helwig という顔ぶれであつた。

この Discussion で面白いと思われたのは会場から質問を紙にかいて自由に提出でき、それを討論者がよんで答えてくれるという試みであつて、日本のように立上つてしゃべることが気楽にはできないような雰囲気学会では効果を発揮することと思う。

学会の他に種々の泌尿器科医療器具の展示が ACMI その他のメーカーによつてなされた。残念ながらこういう金のかかるものになると種類、質、量ともに日本はまだ貧弱という他ないが、メーカーのスケールが大きくてつねに研究を重ねていることは宣伝員の説明からもうかがえた。X線回折その他の近代的分析装置を用いて尿石を分析する Laboratory が立派に企業として成立ち宣伝までしているのには驚いた。

もうひとつの印象として学会の運営および雰囲気ともに大学という色彩が全くなく、いわんや日本の学会のように一部大学が支配的な空気を張る傾向などみられない。これは泌尿器科医の大多数は所謂 Attending Urologists であつて大学とは直接関係がないからである。米国にはこのように多数の泌尿器科専門医が独立して活躍しているのに日本ではまだ大学や大病院での皮泌の分離が論議されている現状である。米国では泌尿器科医の数は眼科や耳鼻科とあまり変わらず、いわんや皮科などぐんと引離している。事実泌尿器科領域の疾患の頻度はそれだけ高い。学の独立は勿論緊要、病院に眼科、耳鼻科がなくとも泌尿器科があるという位にならねばウソである。

(1960年3月28日記)

前号の「アメリカ通信」に7月からの住所を記したが、次の如く訂正する。  
Duval Medical Center. Jacksonville 8. Florida, U.S.A.